



25
「夏」

先日、出先で急に『のり』が必要になった。

コンビニ、コンビニ……わざわざMAPで検索しなくても見つかるだろう。そう思い歩いていると、路地にぽつんと古い文房具屋さんを見つけた。

店先のワゴンには、すこし陽に焼けた色とりどりのファイルが傾きながら並ぶ。家の中に入るような感覚があったので、「こんにちは」と小声で言いながら入店する。すると、肌にぬるい風が当たった。ぎこちない音がした。

ぎいー……ごお……

不規則にうねるような音。

店の片隅に、少し黄ばんだ白い扇風機が置かれていた。首振りの切り替え点で、ひと呼吸置いてからまた逆方向に動き出す。その姿はちよつとしんどそうにすら見えるが、ちゃんと風を送り続けてくれる。

「フレフレハ　ウチュウジン　ダ」――。

扇風機に向かって声を出すと、ぶるぶる震えて変な声になる。意味もなく、会ったこともない宇宙人の真似をしてゲラゲラ笑っていた記憶が、唐突に甦った。

なんというか、風の質が懐かしい。

家ではもっぱらクーラーだ。この酷暑ではそれ以外あり得ない。存在を忘れるほどに静かで、新しいモデルともなるとAー搭載で、人に風が当たらないように向きの調整までしてくれる。

一方で扇風機はというと、動いているのがよくわかる。いかにも「そこにいる」感じがある。ちよっとうるさいほどに。でも、それがなんだか愛おしくもあり、不思議だ。

きれいに整頓された見やすい店内で、用途にぴったりの『テープのり』を見つけた。ほかにも、万年筆に使うのであろう様々な種類のインクなど、さすがの品揃えだと思った。

レジの横で店主のおばあさんが丁寧に包装してくれる。「暑いねえ」とぽつりと言いながら。

確かに暑い。僕がいつもいる場所よりもずっと。でも、けっして嫌じゃない空気が流れていた。

店を出ると、さっきまでうるさく鳴いていたセミの聲が、静かになっていた。その静けさの中に、扇風機の「ごお……」という音がまだ残っている気がした。

便利で静かで、何でもスマートになっていく中で、僕はときどき、こんな夏が恋しくなるのかもしれない。